

アカシア夜話 アカシアンナイト 第9話 (創立100年史作成の裏話…長谷川乙彦像)

2005年4月17日、母校は創立100年を迎え、盛大な記念式典が開催されました。アカシア会は式典に協力するとともに、盛大な祝賀会を実施し、また、各種記念事業を行い、会員の寄付をもって母校講堂の改修をしました。

この時に発行された創立100年史は、母校の歴史をくまなく記録したかけがえのないもので、編纂に当たられた小山清先生のご尽力の賜物と言って、過言ではありません。

今回、小山先生に記念誌に書けなかった裏話をお聞きし、その一端をご披露します。

創立80年史と100年史

農(わし)は、つごう32年間附属に奉職したんよ。元教官の中には、農より長く務められた先生もよおけえ居ってじゃし、偉い先生方もずいぶんおられたが、100年史の執筆に当たったという事は、他の先生方に比しても、誇れる事じゃと思う。ほいじゃが、記念誌の編纂という仕事に関しては、80年史のほうがはるかに大変じゃった。

戦後のことは記録も残るとるし、大体分かるんじゃが、戦前のことは、OBを訪ねたり、資料の寄付を頼んだりして、全く様子の分からんかったものを、時間をかけて徐々に形作っていったんじゃ。そうやって基礎ができておったから、100年史は比較的楽にできた。

とは言うても、寄稿文とデータを載せた別巻を除いて、上下巻合わせて1,484ページじゃから、来る日も来る日も原稿を書いとった。

長谷川乙彦初代主事

附属初代の主事(校長)は、既に広島高等師範学校教授として着任していた長谷川乙彦先生じゃが、第1回の入学式の時に、4条から

- 一 生徒訓條
- 一 規律ヲ守リ禮儀ヲ正シクスヘシ
- 一 師長ヲ尊敬シ命令ニ服従スヘシ
- 一 誠實を旨トシ言行ニ表裏アルヘカラス
- 一 勤勞を重シ時間ヲ空シクスヘカラス
- 一 生徒訓條
- 一 規律ヲ守リ禮儀ヲ正シクスヘシ
- 一 師長ヲ尊敬シ命令ニ服従スヘシ
- 一 誠實を旨トシ言行ニ表裏アルヘカラス
- 一 勤勞を重シ時間ヲ空シクスヘカラス

なる「生徒訓条」を示された。当時、ほとんどの中学校が「質実剛健」を言い、旧制高校生の弊衣破帽をまねた生徒が溢れておった。これに対し、附属で示された「規律を守り礼儀を正しくすべし」から始まる生徒訓条は、他の中学校と一線を画したものであった。弊衣破帽の中學生たちが、ややもすれば粗暴放漫に流れ、また、大言壮語に走るのを戒め、秩序や礼儀を重んじる、当時としては異色のものじゃった。

世間は、きちんとしている附中の生徒を見て、お坊ちゃん学校ともうわさしたが、英国紳士的な紳士の養成を目指した結果であり、その後の歴史を見れば、先見の明があったという事になろう。

こういう事が、今も続く附属の、他校にはない特徴の一つとなっておる。

主事の胸像

母校は、大正4年(1915年)の創立10周年から昭和10年(1935年)の30周年まで、5年ごとに記念式典を開いておった。昭和5年(1930年)の創立25年式典で、初代主事の長谷川乙彦先生に胸像を贈るとるんよ。2体作って、1体を学校に置き、もう1体を贈呈しとるんじゃ。学校にあった1体は、原爆で焼けてしもうたんじゃが、長谷川先生に贈られたのが、今、講堂の入り口に設置されとる胸像なんじゃ。

80年史の調査で、長谷川先生の娘さんの家を訪ねたんよ。長谷川先生の長男の輝彦さん(12回)は既に亡くなり、輝彦さんと同期の森本義雄さんに嫁がれた長女の須磨子さん(豊葦会17回)のところに、訪ねて行ったんじゃ。表向きは資料を探してという事じゃったが、内心、25周年で贈られた胸像が無いものかと思おとった。東京の世田谷にあった家を訪ねて話をしたが、資料は僅かしか残ってらんかった。



小山清先生 平成24年10月13日

200メートル先に兄の家があるという事で、輝彦さんの奥さんを訪ねてみたんじゃ。

資料は処分され、ほとんど無かったんじゃが、胸像は物置小屋の中に有ったんよ。奥さんは、「持って帰りますか?」と言われたんじゃが、農はここで大失敗をしたんじゃ。まだ宅配便も普及してなかった時代、その場で持って帰るんは大変じゃ思うて、「後日…」と言うてしもうた。後日、お願いすると、当時弁護士目指して修行中だった孫の直彦さんに相談してみるという事で、話が途切れてしもうた。

それから20年経って、今度は対価についても言われれば出す気で、胸像をもらいに訪ねたら、孫の直彦さんは成人して、一人前の弁護士になっておられたんじゃ。今度は「寄贈します」と言われ、「ちょうど、岩国に行く仕事があるので、学校まで持参します」と。

この胸像が、創立100周年の記念式典で披露され、アカシア会員の寄付で整備された、講堂の入り口に設置されている

Profile

昭和13年2月14日岡山市生まれ、20年7月新見市へ疎開、36年3月広島大学教育学部卒業、38年3月大学院修士課程修了、同年4月広島県立呉三津田高校、41年4月から平成10年3月まで広大附属・高等学校教官

「長谷川乙彦像」なんよ。

それから、長谷川乙彦先生のお宅は、主事を退任された時に、教え子や父兄が集めた饞別で、土地と屋敷を購入されたということじゃった。旧制中学の時代は、全国で三校しかない国立中学(広島高師附属中学校と、東京高師附属中学校、学習院中等科)という事で、卒業生のプライドも相当高かったんじゃが、同時に、プライドの基になる恩師に対する感謝の念が、当時は相当に高かったんじゃと思う。



雑感

プライドと感謝という事を話の中でしたが、これは今でも大切な事じゃと思うんよ。旧制の時代とは違うが、(63回の)あんたらも、当時は広島で一番の学校という、良い意味でのプライドがあったんじゃ。その頃は、先生たちにもそういうプライドがあった。附属の先生になるのは、本当に名誉なことで、一生を捧げる気で赴任したんじゃ。父兄もやはり、プライドを持っておられたよの。

附属が昔のように、1番と言われる学校になるには、先生がそういうプライドを持った集団になることが、大事な事なんじゃないかと思うとる。もちろん、父兄の方々もじゃ。大人である先生と父兄が高いプライドを持って教育にあたれば、子供たちは必然的にそうなるんじゃないかの…。

編集にあたって

あと2年余りで創立110周年を迎える今日、100年史を編纂された小山先生なら、裏話が相当あるに違いない…と、取材を申し込みました。私たちは、中3の時に小山先生の授業を受けており、昔話が弾んで、裏話のほんの一部しか聞く事ができませんでした。

思えば、先生とはクラスの男子全員で、先生の授業をさぼってサッカーをし、T君と私(甲斐)が空中衝突して、入院と流血の事故を起こして以来の腐れ縁? 「今ならあの事故で、農はクビじゃったかもしれん。」と先生は言われますが、まだまだ裏話をお聞きしますので、これからもよろしく願いいたします。

***** 文責・編集：甲斐 稔(63回) 編集補：河本良子(63回)